
Humpty=huntbrl ~ハンプティー=ハントブル~

洸淋寺 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Humperdinkハンプティ＝ハントブル

【Zコード】

Z7599D

【作者名】

沐浴寺 凪

【あらすじ】

世界は時を経るごとに暑くなる。その気温は平均で約五十・・・。
。そんな所で人間の生存は不可能。政府はとある研究者に熱を遮断する服を作るよう命じた。研究者は開発を進め、ウォームシャツトースツという服を開発した。しかしそのウォームシャツトースツが大変な事態を巻き起こす事となつた！？

ハンプティー・ダンプティー。それは一度壊れてしまつたら、一度ともとには戻らないもの……。

2050年……今は室温が四十五。これはまだかなり涼しい方だ。一日で八十を越える日も一年を通してざつと数十回はある。こうなると人間は生きていいくのが不可能だ……。

そこで我々は政府直々の命令で、熱を遮断する洋服を作るよう命じられた。

我々は数年に渡り研究に研究を重ね、熱を遮断するには卵型がいいと判断した。いや、卵型というより卵だらう。

卵は大切なヒナを守るために母鳥が対応してきた愛情だらう。卵の成分で洋服を作れば熱を遮断出来る。我々はそう考えたのだ。そして案が挙がつてから数年……。我々はついに熱を遮断する洋服、通称ウォームシャツースーツ。頭から下半身まで卵の殻のような物で包み、手と足と目だけを出すようにした。やがて政府はこのスースを認め、世界へ流布するよつ言つた。しかしそれは惨劇の始まりであった……。

「……」

オレは闇に息を潜め、ハンプティーに忍び寄る。狙いは三丁目の花田さん一家の卵化だらう……。

ウォームシャツースーツが出来上がり、政府はまず母国アメリカへ流した。

ウォームシャツースーツは熱を遮断する事が出来る。病氣にも掛かる事は無い。しかし大きな難点があつたのだ。ウォームシャツ

トスースは一度着用すると脱ぐ事が出来ないという事。無理に脱ごうとすると激痛により自我を失う事。その二つだ。政府はその難点を知りながらも熱を一刻も早く遮断しようと難点を公表せずに流した。

やがて時は経ち2080年。ウォームシャツトスースはアジア諸国の中の一つ、日本へも進出した。その時はもうアメリカの人々は自我を失っていた。

2081年、日本でウォームシャツトスースが着用され始めた。しかしそこでカオスが舞い降りた。今まで平均気温が五十 以上だつたのがいきなり七 まで下がつたのだ。

しかし時すでに遅し。日本では約半分の人々が卵化していた。あるおえらいさんはウォームシャツトスースについてこう言った。

「ウォームシャツトスースは昨年までは活躍した。しかし気温はこちよくなりもう必要ない。ウォームシャツトスースは端から見るとまるでハンプティー・ダンプティーのようだ。そんな恥らわしい格好はもうやめよう！皆で服を脱ぐんだ！」

その途端日本でも自我を失った人々が増え出した。

自我を失ったハンプティー達は仲間を増やす為に町を徘徊し、狙いを定めた奴にウォームシャツトスースを被せる。これで立派なハンプティーの出来上がりだ。

話しあはそれがオレはそんなハンプティー達を元に戻す仕事をしている。

卵化してしまった人間を元に戻すには卵の殻を割るしかない。卵の殻は硬く、なかなか悪のは難しい。しかも割るのに手間取つてゐるうちに自分までハンプティーにされてしまつ。あんなんすんぐりむつくりだけはゴメンだ。

「誰だ？」

ハンプティーが言う。

「ハンプティーの癖に喋れるのか。つまりまだ自我は失っていないな？」

「ああ・・・」

自我を失うとハンプティーは喋れなくなる。

「オレの名前は009」

「009? なんの番号だ?」

「オレの両親はアメリカでのウォームシャツスーツの着用でオレの小さい時に死んだ。それからオレはハンプティー撲滅組織、通称ハンプティー・ハンターに入れられた。009それがオレの名前だ」

「・・・」

ハンプティーは黙り込む。

あのハンプティーはオレを哀れんでいるのか?

「私は、もうこれ以上ハンプティーの被害者を出したくないと思っている。責任者としての思い、そして君のよつな親を、命を、大切な人を失った人々を救わなければならない」

「・・・あなたは? 何物? 責任者?」

「ウォームシャツスーツを開発したのは私の祖父だ・・・。そしてウォームシャツスーツの危険性を知りながらもそれを隠して流したのは私の父だ。父は私の小さい頃にハンプティーとなり、死亡した。しかし父は最期、私をハンプティーにした。だから私はこの姿・・・。さあ、私を殺してくれ 真の恨んでる人物の息子だ!」

ハンプティーの原因はこいつの父・・・。こいつを殺しても恨みが晴れるわけではない。

「ハンプティー・ハンターの仕事はハンプティーを殺す事では無い。あくまで元通りにする事だ。だからオレはあなたを元に戻す。それが使命だから」

「・・・そうか。私は君に殺して欲しかった。下手をすれば自我を失つてしまふ事を恐れ、生きている日々はもう憲り憲りだつたからね。はつきり言うと君に殺して欲しかつた」

「こいつは何を言つているのだ?」

「だからオレはおまえを助けてやるつて・・・。」

「無理だ。開発者の孫だ！君なんかよりもずっとハンプティーについて詳しい。ハンプティーは自分だけでなく、他人に抜がされそうになつただけで自我を失つてしまつんだ。かち割らうとするなんて言語道断。自我を失うと体はハンプティーによつて乗つ取られる。殻を全て壊すまでそれは解けない。それにハンプティーと化してしまつたらその強さは尋常では無くなる。君みたいな子供では到底かなわない。あつという間に君もハンプティーだ！」

「子供では無理……か。そんなねやつて見なきや分かんねえよ！」

オレは地を蹴つて舞い上がる。そしてハンプティーに蹴りを入れる。

「ま、まつ……」

今まで普通の目をしていたハンプティーの目があつといつ間に黒くなり、腹部の辺りからは亀裂が入つた。

自我を失つたか。

「つと。逝くぜ！ハンプティー！」

右、左、右、右、左と軽やかに蹴りを入れる。

ダン！

腹に重たい物を感じた。

「つ！？」

腹部には亀裂を口代わりにして噛み付いているハンプティーが。

「い、いつの間に！？」

通じていないと分かつていてめつい、口からそんな言葉が漏れてしまう。

段々と血が流れて行く。意識が朦朧としてきた。

「・・・・・」

オレはこのままハンプティーにされるのか？

なつてたまるものか。いや、なつては行けない！ハンプティーになる位なら・・・・・。

オレは最悪の事態の為に忍ばせて置いた、加工済み二ト口を取り出した。加工をした二ト口は爆弾どうぜん。いや、爆弾だ。

オレは死ぬが中の人には助かる。あの人だつてこんな人生を望んでなんかいなかつた筈だ・・・・。

二トロの入つた試験管を地面に叩き付ける。

パリン・・・・。

クリアなガラスの割れる音が響く。

三秒・・・二秒・・・一秒・・・・。

「フィニッシュ！」

・・・・。

もう何の音も聞こえない。オレは朽ちていくだけ・・・・。あいつは生きる。立派な科学者として。祖父の跡を辿り・・・。あいつなら、ハンプティーを撲滅する研究をするだろう。たつた今出会った人物にオレは賭けてみたいと思ったのだ。たとえそれが命だろうが構わない。ただオレは朽ちるだけ・・・。

死んだ後には無しかないのだろうか。まあオレは天国だとか地獄は信じないからそれでいい。

オレは死んで無となる。

さよなら・・・。名前すら聞けなかつたが、オレはおまえを信じる。オレが賭に勝つか、ハンプティーが勝つかは分からぬ。だが、おまえだけがオレの希望。

・・・・じゃあな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599d/>

Humpty=huntbri～ハンプティー＝ハントブル～

2010年10月8日15時47分発行